

異星人

深井佐久磨

Fujii Sakumoto

文藝書房出版

異星人ドノバン

深井佐久磨

文藝書房出版

カバー画像の一部は、ネット上から借用させていただきました。

目次

一	三万光年彼方からの訪問者	
二	ひったくり	25
三	山林を守る化け物	31
四	万引き	38
五	車内のゴミ	44
六	詐欺師	50
七	銀行強盗	63
八	児童へのいたずら	67
九	ひき逃げ	74
十	空き巣	79
十一	通り魔	84
十二	いじめ	92
十三	飲酒運転	100
十四	永遠の別れ	105

異星人ドノバン

三万光年彼方かなたからの訪問者ほうもんしや

当時、私は名古屋のS大学を卒業して、就職活動中の身でした。

長野の実家で農業をしている両親は健在で、私は卒業後も仕送りを受けながら、名古屋に近いT市でアパート暮らしを続けることができました。しかし、なにかとお金のかかることが増え、仕送りだけでは足りず、アルバイトもしました。一方、希望した企業きぎょうから次々と送られてくる不採用の通知に暗くなりがちな気持ちをまぎらすために時々、近くを流れる木曽川の広びろとした川辺りを歩いていたある日、ふと、しばらく忘れていた好きな山登りを思い出し、今年はどこかへ行ってみようと考えました。

そして、夏がやってきました。郷里きょうり、長野の八ヶ岳にのぼろうと計画した私は、一

人でそこに向かい、帰り道で広大な樹林帯に迷いこみ、一生、忘れることのできない奇想天外な体験をすることになったのでした。

七月下旬のある日の早朝、JR中央線で、名古屋駅を立ち、途中、塩尻から、バスで美濃戸口まで四十五分、ここでバスを降りると、八ヶ岳の主峰、赤岳を目指しました。およそ六時間で、予定通り、頂上の山小屋に、夕刻五時頃に着きました。

翌日は、また朝早く小屋を出発。尾根を歩いて、途中から野辺山高原に下りるつもりが、どこで道を見失ったのか、深い森林に入りこんでしまいました。行けども行けども、ぶな、もみ、だけかんばなどの林が延々と続く原野で、つかれきった私は、一本のだけかんばの根元に腰をおろすと、間もなく、眠気におそわれ、ぐっすり、眠りこんでしまいました。

それから、どのくらい経ったのかわかりませんが、誰かに肩を叩かれて、目をさますと、目の前に、見知らない、私と同じ年くらいの若い男が立っていました。そして、「どうしました？ ひょっとして、道に迷ったのではありませんか？」と言うのです。

「そうなんです」ようやく助かったと心が明るくなりました。そして思わず、「君は？」とたずねると、それには答えず、男は、何かに気づいたように、しゃがみこむと、「足にけがをしていますね、出血していますよ」と言うので、足を見ると、ズボンの下から、幾すじもの赤黒く固まった血のあとがありました。夢中むちゆうで道をさがしているうちに、どこかで転んで打ったようです。

「歩けますか？　そこで手あてをしてあげましょう」

男の指さす方向に首を少し曲げると、おどろきました。気づかなかったのですが、だけがんばの茂る林の中に白い建物が見えます、いや、建物にしては、形が変です。まるで大きな、平べったい玉ねぎです。しかも、銀色に光っています。その場には似つかない。珍妙ちんみょうな物体は、本やテレビで見おぼえのあるUFOに似ています。

丸い窓、着陸ギアのような物も付いていて、アダムスキー型といわれるUFOにそっくりです。誰かが造って置いた巨大な前衛芸術品にしては、場所が不自然ですし、目的も分かりません。ぼーっとしていると、

「おどろかせたようです。そうですね。そうです、君の思っているとおりに、これは宇宙船です。

ぼくは地球人ではありません。遠い宇宙の彼方からやってきた異星人です」

「宇宙人？ どう見ても地球人と思えません？」

「それについては、あの中で話しましょう」

そう言われても、しばらくは体が動かないほどショックを受けていました。しかし、けがを直さなくてはと思い、異星人と名乗る男のあとについて行きました。物体に近づくと、それは、直径がおよそ一〇メートル、高さが四、五メートルはあろうかと思われる大きさです。そして、その一部が左右にひらくと、その下から、タラップが下りてきました。それを上って中へ入ると、電灯らしいものは何一つ無いのに船内は明るいのでした。UFOといえば、未確認飛行物体の意味ですが、これは、まぢがいなく異星人飛行物体のようです。そう思うと私は、ほかにも何人かの宇宙人が目の前の、もう一つのドアの奥から出てくるのではという気味の悪さで体を固くしていると、「そこに座ってください」と言われて、そばの椅子らしいものに座ると、男は私のズボンをすねまで捲り上げ、白い消毒液のようなもので傷口を洗い、ほうたいと化膿止めの注射をしてくれました。私は、ていねいにお礼を述べてから、

「君は、どこの星から来たのですか？」と聞くと、「われわれが『エルス』と呼んでいる、地球によく似た惑星わくせいです」

「そこまでの 距離はどのくらいですか？」

「地球人の長さの単位で、約三万光年です」

「なんですって！ そんなに遠いところから、どうやってきたんですか？」

「高速宇宙船を使い、ワームホールを通じて来たのです」

「ワームホール？ 聞いたことはありませんが、本当にそんなものがあるのですか？」

「あるのです。ブラックホールの回転によってできる、虫が食った穴じくうのような時空トネルをいうのです」

私には、さっぱり分からないのでそれ以上、それについての質問はやめました。

「どうして言葉が話せるのですか？」

「エルス人が最初に地球にやって来たのは、三〇〇年以上も前ですが、その後、二〇〇年近く経って、地球人がラジオを発明し、放送を始めた時に、その電波をとらえて地球人の言葉を研究し、ついに先ず英語を理解すると、それによって、いくつか他の

言葉も分かるようになったのです。ぼくは、研究所で日本語を学び、今回の宇宙旅行に参加したのです」

「君の顔や姿は、地球人にまったくよく似ていますが……？」

「それにお答えする前に、ぼくの名は、ドノバン・コンプ・ヒアロといいますが、ドノバンと呼んでください。で、君の名は？」

「タナカ・マサオです。マサオです。マサオと呼んでください」

「マサオ……くん、ですね、よろしく。ぼくは、まず見たとおり、男です。エルスでは、これでも有名なマジシャンの一人で、姿はいろんなものに変えられます」

「本当の姿を見せてもらえますか？」

「全体としては、そうちがいはありませんが、こまかい点では、見慣れないと、少し気味が悪いと感じるかも知れません」

と言いながら、すばやく変身してみせました。

顔形、骨格などは、日本人の私とよく似ていますが、ひふは、うすいピンク色、髪の毛は、はい色で、やわらかそうです。頭が少し前後に突き出ている、手の指が女の

ように、細く、しなやかな感じですよ。

「君の演技は、とてもマジックとは思えませんが？」

「エルス人の科学は非常に進んでいます。ぼくのそれは関係ありません、単なるマジックです。科学といえば、この宇宙船、いや、正しくは、宇宙艇ホトと呼ぶこれは、今、君の目には見えています。科学技術で、ほかの人たちには透明で見えなくしてあるのです。電波も吸収してしまいます」

「ボートと呼ぶのはなぜですか？」

「定員四人の小さなものだからです。今日は、ぼくが一人で飛んでいて、ちょっとした故障を起こし、ここに不時着したのですが、修理を終え、ようやくほっとして背すじを伸ばし、何気なく向こうを見ると、たおれている君に気づき、飛び立つのを一時中止をしたというわけです」

「ぼくを助けてくれたんですね、ありがとうございます。ところで、これをボートというなら、どこかに、本船とか、母船とかが居るのですか？」

「地球の上空、約一〇万キロの空間に宇宙母船が地球を周りながら待機しているの

す。母船にも、ボートにも重力調節装置が付いていますから、常に地上の重力と同じ状態で生活できます。母船の大きさは、横の長さが約三〇〇メートル、高さ、幅は共に約二〇〇メートルです。地球人に発見され、誤って攻撃されたら、めんどろなもので、船体は透明、電波はアンテナ部分は別として、全て吸収し、反射しない構造はボートと同じです。母船には丸い窓が横一列に並んでいるところは、列車の車両を大きくしたようなものです。乗船人員は六〇名。そのうち乗組員は医師と看護師を入れて二五名で、それぞれに担当部署はありますが、実際は、ほとんどを自動制御装置が行っています。ボートのかずは十隻で、各ボートには、必ず操縦免許を持つクルーが一名同乗して、いつでも自由に地球上空を観光飛行して楽しんでます」

「すると、ドノバン君はクルーですか？」

「いや、ぼくは観光客ですが、特別に操縦士そうじゆうしと医師の免許をもっています」

「母船へは、ぼくも連れて行ってもらえますか？」

未知への不安はありますが、好奇心を抑えきれずに聞いてみると、

「実は、さつき『化膿止め』と言った注射は、万一、異星人と接した時に、お互いの

体を持つ危険な未知の病原体から体を守るための予防接種だったのです。だから、その点は心配はありません。ちょうどこれから母船へ帰るところです。行きましょう」

「船内の空気は、ぼくにとつても問題はありませんか？」

「だいじょうぶです、酸素濃度はエルスも地球のそれとほぼ同じだから船内も同じです。それに水はもちろん、食べ物も十分に貯蔵してあります」

私が最も聞きたかった地球へ彼らがやって来る目的はなんと、観光だったとは意外でした。内心おどろいていると、

「さあ、行きますよ」と言うドノバンの声と共に玉ねぎ型のボートはゆっくり地上を離れ、やがてスピードを上げると、見る見るうちに、眼下の原野が小さくなって消えてゆき、かわって日本列島の形が浮き上がってきました。そしてそれも大気の層の中に薄く小さくなってしまふと、周りから明らかに丸味を持った地平線、水平線が現れ、上下左右が一本の線になってつながると、地球の姿が完全な球体となって見えてきました。

短い間のできごとでしたが、猛スピードのわりには、内蔵が上下に押しつけられて

気持ちが悪くなったり、頭から血が下がって、目の前が暗くなったりすることはありませんでした。

大きさが満月を二〇〇個も合わせたような、目も眩むほど明るく美しい青い地球に見とれていると、

「さあ、着きましたよ」という声に、うしろをふり返ると、反対側の窓から、ちらっと見えたのは、ドノバンの言っていた、列車の車両のような巨大な物体の一部です。宇宙母船でした。

ボートは母船の横から後尾こうびにまわりこむと、大きく開いた口から静かに吸いこまれるように船体に入っていました。入ると、入口が閉じ、かわって正面に再び別の大きな口が開くと、ボートは中に進み、停止すると口が閉まり、同時に「ヒュー」という大きな音がしてボートが震動しました。音が消えると、また前方に口が開いてボートが移動し、広々としたフロアに着船しました。

二重扉は、空気のない外から帰ってきたボートを、空気のある室に移すためだと、あとで分かりました。

ボートを下りると、そこはボートの格納庫かくのぐらでした。しばらく歩いて進み、大きなタラップを上がっていくと、自動ドアにぶつかり、広いホールに出ました。

見ると、大勢の人たちが、拍手で私を迎えてくれたのにはおどろきました。どうやら、私が地球の美しさに気を取られている間に、ドノバンが母船に私を連れていくことを連絡しておいたらしいのです。

青い、絹のような光沢こうたくのある、そろいのスーツに身を包んだクルーを交えて、色とりどりの服装をした船客の中には、若い人、老人らしい人も見えました。とても親しみ感のある人たちでした。私はひたすら、頭を下げるのみでした。ここにこしながら、一人一人が握手あくしゅを求めてきたときは、感動しました。困ったのは、言葉が分からないことで、地球のどこかの国の言葉と思われるものも耳にはいりませんが、英語が少し分かるていどの私には無理です。ドノバンの通訳で、幾つかの言葉を紹介すると、

「いらっしやい、よく来てくれました。私たちも、いつかは地球人と接してみたいと考えていました』

「ゆつくり、船内を見ていってください」中には、「最初に地球にやってきたエルス人は、動植物といっしょに、人間も何人か学問の研究にエルスへ連れ帰った事件があり、道徳的な大問題として、今は禁止されています。無知だった昔のこととはいえ、心からお詫びいたします」などという、おどろくべき発言もありました。

エルスは世界が一つの国になっていて、かつての国は、それぞれ「州」^{しゅう}とされ、言葉はどこでも世界共通語で通用しますが、別に独自の言語はもちろん、宗教、風俗^{ふうぞく}、習慣^{しゅうかん}を持つ州もあるとのこと。三〇〇年ほど前までは、戦争もあつたが、今はまったく無く、核兵器はもちろん、軍備と名の付くものは、どこの州にも無いということです。犯罪も無く、警察は消防と一つになって、「防災署」となり、火災、自然災害、事故などに備えたものだと言われました。

船内には常にBGMが流れ、むろん私には知らない曲ばかりですが、静かで、心が安まります。

また、広いホールの一つには、見なれない用具がいろいろ有りましたが、運動不足を補うための物のようです。かべの大きなスクリーンには、文字、記号のようなもの